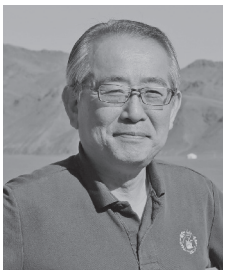
巻頭言

ワーカーズは「水位上昇」にどう取り組むか？

安藤 聡彦（埼玉大学教育学部教授／公益財団法人トトロのふるさと基金理事長／会員）



イギリスのスコットランド中部にパースという町がある。北海に流れ込むテイ川に沿って広がる静かで風光明媚な町だ。

30年ほど前、筆者はこの町のパースシャー自然誌博物館という小さな博物館を訪ねたことがある。目当てはこの博物館の設立母体であるパースシャー自然科学協会という団体で19世紀末に活動したチャールズ・マッキントッシュ（1839–1922）というひとりのアマチュア・ナチュラリストについて知ることだった。

イギリスでは、工業化が始まる18世紀の半ば前後から全国各地でアマチュア・ナチュラリストたちによってナチュラリスト協会が設立され、その地域の自然の調査や標本化が進められてきた。このパースでも、1865年に上述の自然科学協会が設立され、1883年には収集した自然資料や文化資料を保存・公開するために博物館が開設された。マッキントッシュはこの地域の郵便配達夫であったが、自転車に乗って地域を走り回っているうちに豊かな植物相、とりわけキノコに関心をもち、協会に所属する熱心なナチュラリストになったのであった。

ある年の夏、このパースにロンドンから一組の家族が避暑にやってくる。その家の自然好きの長女は、このマッキントッシュと出会ってキノコの世界に目覚め、たちまちその研究に没頭することになった。「チャーリーは、竜のように博識だ。」少女は日記にそう書きつける。彼女の名前はビアトリクス・ポター。後に『ピーター・ラビット』シリーズの作者として活躍し、後年は湖水地方のナショナル・トラスト運動に貢献したあのポターである。

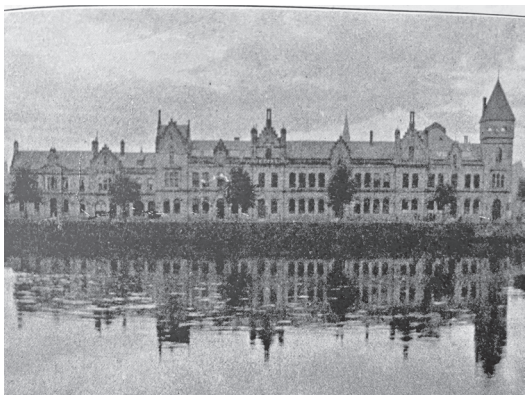
いったい幼いポターをして「竜のように博識」と言わせしめたマッキントッシュとはどんな人物であったのか。なぜかれらは自ら自然探求を推し進めるばかりでなく、子どもたちに「自然の知識」を伝えることにも積極的であったのか。そのあたりのことが分かれば、イギリスの環境保全運動の基層にある人間形成のありようが少しは理解できるのではないか。筆者はそんなことを思いながらこの博物館を訪ねたのである。

100年以上かけ協会の会員たちが蓄積してきたデータをもとに構成された地域の自然や歴史をめぐる展示は見事だった。もちろんマッキントッシュとポターとの交流を記述した展示もある。筆者は近くにいたスタッフの女性に、自分はこのマッキントッシュのことを知りたくて日本から来たことを伝えたうえで、たし

か彼についてはずいぶん前に書かれた伝記があるはずだが、それが読めないだろうか、と尋ねてみた。返ってきたのは、「あら、その伝記なら、うちの売店でまだ売ってますよ」という驚くべき回答だった。

分厚い『パースシャーのナチュラリスト；インヴァーのチャールズ・マッキントッシュ』(1923年)はこうして我が家にやってくることになった。自然と文化財を愛するイギリスの人々は、同時にそれらにかかわる資料を徹底的に保存することにもこだわってきたのだが、この伝記はまさにそうしたかれらのエトスの象徴のように思われてならない。

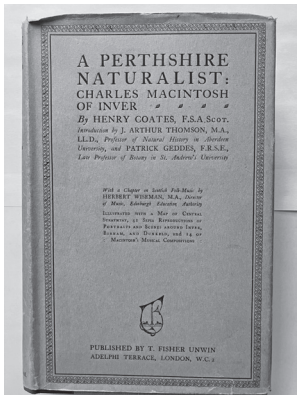
このような記憶をたどっているうちに、あの博物館はいま現在どうなっているのだろう、という思いにかられ、早速インターネットで調べてみた。この春市庁舎の一部でリニューアルオープンしたパース博物館のHPの最初には、水浸しの地域の写真を背景に何とこう書かれているではないか。



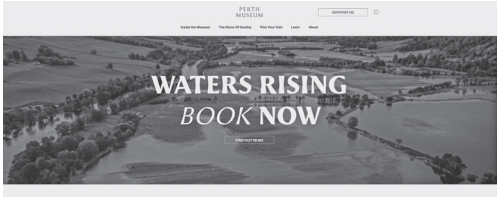
パースシャー自然誌博物館

パースシャー自然科学協会のエクスカーション

パースシャー自然科学協会子どもセクション



マッキントッシュ伝記



水位上昇；今すぐ予約を

今年の11月初旬から「水位上昇」という特別展をやるので、ぜひチケットを予約して下さい、という広報である。そこにはさらに続けて次のように記されている。

本展示会は、スコットランドや海外、聖書における記述から、メソポタミアやエジプト、北米の神話、さらには私たちの地域における洪水に関する物語や事物をたどります。この展示会は、地球的規模で広がる気候危機への脅威を捉えるとともに、住民による写真、記憶、オーラルヒストリーによって、パース及びキンロス地域のコミュニティ、ビジネス、インフラに対する洪水や異常気象のインパクトを考察するものです。(中略)さらにこの展示会は、スコットランド国立博物館から借り受けた展示物とともにCOP26や重要な反気候危機闘争に光をあてることによって、気候危機にかかわる行動を推奨しようとするものです。

https://perthmuseum.co.uk/new-autumn-exhibition-highlighting-the-climate-emergency-unveiled/

このように予告をしたうえで、HPは住民に洪水の経験にかかわる写真を提供してくれるように呼びかけている。「竜のように博識」な人々の子孫たちは、いまこのように気候危機と対峙しているのである。

マッキントッシュら、アマチュア・ナチュラリストたちによって設立されて以来140年、パース博物館が市民とともに地域の過去・現在・未来をつなぐ拠点であり続けていることに筆者は深い感銘を覚える。そのうえで、彼らが100年以上にわたって「チャリティ」という枠組で取り組みつづけてきたこうした環境研究／保全／教育事業に、いま私たちは労働者協同組合という組織形態で挑戦することはできないだろうかと筆者は考えている。なぜ労働者協同組合なのか。それは、環境問題と対峙するには民主主義の徹底が不可欠であるからであるし、こうした地域の課題に取り組むことを仕事へと練り上げていくことこそ重要であるからである。

労働者協同組合センター事業団のご支援によって、私たちは2019年度以来「地域と出会い、働くことを考える」という寄付講座を続けさせていただいてきた。以上はその過程で得た私なりの学びの結論である。